日本気象学会創立100周年記念レビューの特別計画について

「天気」編集委員長
内　田　英　治（56年3月迄）
杉　村　行　勇（56年4月以後）

日本気象学会も今年で100年を迎え，その機関誌「天気」も特別企画として，①レビュー（1年を通して各分野の顕著な発見と展望を解説），②4月特別号（レビュー，座談会，通史，総目録）の2件を設定した．

そもそもこの計画は昭和54年春頃より具体化し，当時の委員長 内田英治を中心に，100周年にふさわしい企画を練りはじめた．その際，諸案が提出された中に，今年の「天気」に毎月一編ずつ，「この100年間における気象学上の顕著な発見とその後の発展」についてレビューを掲載したらという案があり，これを中心に読者にアンケートをとることにした（27巻7号）．

そしてその結果を集計して28巻2号に発表した．これによると，非常に多くの希望として「長波の発見と数値予報」というのが挙げられた．これについては，4月の特別号に掲載するということになった．またスタートの1月号は，まず観測・測器が問題であるとの見地からこれを掲載することになった．12月までの予定課題は次のとおりである．

1月号　観測・測器
2月号　観測・通信システム
3月号　気象要素解析法
4月号　長波の発見と数値予報
5月号　大気中の諸じょう乱
6月号　大気大循環，気候，長期予報
7月号　対流圏と成層圏
8月号　大気物理・化学（1）
9月号　大気物理・化学（2）
10月号　シミュレーション
11月号　気象災害
12月号　応用気象

もちろんそれぞれの内容は非常に大きいテーマであるため，執筆者には内容の例を相談し，適宜選択していただくことにした．

昭和56年4月よりは杉村行勇に交代して具体的な人選や，編集担当者をきめ，原稿依頼にうつった．

気象学会も100年になると，研究論文も解説も多く蓄積する．もし統計的にものを考えるなら，100年はほぼ十分な年数と言えよう．また過去の諸発見とその後の経過をふまえ，将来を展望することはまさに有意義にして価値あることだろう．このことによって，他の分野で見られる発明発見物語に匹敵する気象物語が学問的レベルではじめて紹介されることになる．

もちろん，各執筆者の方々は限られた頁数と日数と多忙の中で執筆されるのだから，これで十分すべての気象分野をカバーしているとは必らずしも言えない．しかし，この試みの一端が今年のレビューを通じて諸者にくみとられ，今後，気象学と共に歩む人々にとって何らかの積極的意味をもったなら企画者として，これ以上の光栄はない．

さらに気象学も無限に発展してゆくべきものであり，諸者の方々も執筆者と一体となって気象現象を見つめ，自然に対する畏敬の念を新たにされることになろう．

またさらに100年たったら新しく発見と展望が書かれるであろうことを期待して，気象学の歴史の中に立つ者としてのこのレビューを読んでいただくことを切望する．